

## 協会初のオンラインセミナー“視覚リハしゃべり場”の実施報告

金平 景介（公益財団法人 高知県身体障害者連合会）  
 久保 弘樹（福岡県立福岡高等視覚特別支援学校）  
 庄司 健（社会福祉法人 島根ライトハウス ライトハウスイブラリー）  
 原 克典（国立大学法人 島根大学医学部眼科）  
 田中 雅之（名古屋市総合リハビリテーションセンター）

### 要旨：

目的：COVID-19 感染拡大による緊急事態宣言下における各現場の状況報告をテーマに、当協会初となるオンラインセミナーを開催したので、これを関係者に周知する。

方法：協会員を対象に Zoom を使用してオンラインセミナーを開催した。また、セミナー実施後、内容やオンラインセミナーに関するアンケートをとった。

結果：アンケート結果からは、テーマ、内容、開催時間について、参加者からは概ね好評価であった。

考察：アンケート実施のタイミングや事前の資料配布、交流の時間の確保などの課題はあったが、継続的な実施を希望する声も多く、オンラインセミナーは地域を越えた新たな交流の機会として期待されている。

キーワード：オンラインセミナー、COVID-19、感染対策、リモート、連携

### 1. 目的

2020 年は COVID-19 の感染拡大の影響により、当協会においても研究発表大会が中止となり、それ以外の研修会等についても開催方法の見直しをせざるを得ない状況となった。この機にできる新たな会員サービスの展開として、様々な地域の会員が気軽に参加できる研修や交流の機会、協会からのメッセージを発信する場として、オンラインセミナーを開催したので、その実施内容について報告する。

### 2. 方法

#### 2.1. 開催概要

- 1) タイトル：“視覚リハしゃべり場”  
シリーズ「COVID-19 と視覚リハ」

第 1 回テーマ どうしていましたか？—緊急  
事態宣言下の視覚リハ—

- 2) 日時：2020 年 7 月 22 日 20 時から 21 時  
40 分
- 3) 方法：ZOOM によるオンライン開催
- 4) 参加者：視覚障害リハビリテーション協会  
会員（事前申し込み制、定員 80 名）
- 5) 告知方法：会員へのダイレクトメール、  
Jarvi-netML への投稿、協会ウェブサイトへの  
掲載
- 6) 参加費：無料
- 7) 主催：視覚障害リハビリテーション協会  
会員活動支援委員会

#### 2.2. アンケートの実施方法

アンケートは、イベント終了後に参加者にダイレクトメールを送り、添付したテキストデー

タに入力して返信、またはウェブ上の google フォームで作成されたフォームへの入力のいずれかの方法での回答を依頼した。回答期間は7月30日から8月9日とした。

### 3. 結果

#### 3.1. 報告内容

3.1.1. 盲学校（視覚特別支援学校）の現場から一理療教育を中心に（久保弘樹）

3.1.1.1. 盲学校（視覚特別支援学校）における理療教育の概要と筆者の業務：盲学校（視覚特別支援学校）高等部専攻科においては、高等学校の卒業を入学資格とする3年課程として、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の国家試験受験資格を取得するための教育活動を実施している。さらに、筆者の所属校である福岡県立福岡高等視覚特別支援学校（以下本校）独自の学科（以下本学科）として、これらの課程を卒業した者に対する卒業後教育としての研修科（1年課程）を設置している。本学科の教育課程は、施術に必要な現代医学的及び東洋医学的知識を体系的に学ぶための座学と、施術に必要な技能や態度を育成するための実技から成り、筆者は座学を担当している。

3.1.1.2. 本校の対応：本校を含めた県立学校においては、2020年3月2日から5月24日の間、全面休校となり、再開後は、同年11月時点において、以下の措置を実施している。

##### 1) 登校前（生徒・職員）

検温及び体調確認（生徒は朝のホームルームでの聞き取りと記録）

##### 2) 入校時（生徒・職員）

玄関前での手指消毒、マスク着用

##### 3) 授業中

換気の徹底（授業開始後25分、各時限終了後）、教師と生徒、生徒間の距離の確保

##### 4) 授業終了後

教室において手が触れる場所の次亜塩素酸ナトリウムによる清拭（職員が担当）

##### 5) PCR検査陽性者発生に備えて

寄宿舎を含めて、対応手順及び緊急連絡方法の確認

##### 6) 実習の授業における取組

実習においては、特に生徒と教師、生徒間における密接が避けられないことから、感染防止の観点を踏まえて、以下の措置を実施している。

生徒の体調管理と確認、手指の十分な洗浄と消毒、使用する機材やリネンの消毒、生徒と職員、生徒同士の距離や位置関係への配慮、実習室の換気、使用するブースの適正な間隔の確保

##### 7) 臨床実習における取組

臨床実習は、地域住民等のうちから施術対象となる愁訴を有する方に患者として本校に来院して頂くもので、医療従事者の責務として、感染源となったり、感染を広げるようなことは決してあってはならない。そこで、前述の実習における一般的な留意点に加えて、以下を実施している。

患者への協力依頼：来院前の検温、体調確認、体調不良時の来院自粛、手指消毒、マスクの着用

受入れ患者数の制限：学校所在地区や県内の感染状況を勘案して、段階的に増員

患者同士の距離の確保と動線の管理：患者が近接しないように待合室での座席、受付や会計の手続の場所に配慮

患者と実習生・職員との距離や位置関係への配慮：実習に当たる教師・生徒のフェイスシールドの着用、校外からの患者受入れ人数の制限を補い、実習症例数を確保しつつ、質を担保するために、校内患者の募集及びアンケートの実施

校外実習については、実習先から十分に理解を頂いた上で、再開する予定

3.1.1.3. 課題と今後の対応策：今回の取組を踏まえ、更なる流行への備えをも含めて、以下の点が重要となる。

1) オンライン授業実施に当たっての環境やスキルの充実（生徒・職員ともに）

2) 身体的距離を保ちながらの触察や動きの指導方法の確立（心理的な信頼関係の構築を含む）

3) 臨床実習における症例数及び質の確保

#### 3.1.2. 移動支援と訪問サービス（金平景介）

3.1.2.1. 通常業務について：高知市を除く市町村を対象に訪問で、相談訓練（高知県の地域生活支援事業）を行っている。その他に、勤務地である高知県立盲学校内の視覚障害者向け機

器展示室ルミエールサロン（相談、見学対応）、出張機器展示会、巡回相談、視覚障害の理解基礎講座などの啓発活動を行なっている。

**3.1.2.2. 緊急事態宣言下の業務への影響：**事業の主体である高知県と協議をし、緊急事態宣言の開始された2020年4月16日から宣言が終了した2020年5月6日を含む2020年5月中旬まで原則訪問を休止した。5月中旬から感染予防措置を実施しながら段階的に訪問活動を再開した。

#### 1) 訪問活動時の感染予防措置

訪問前の電話での健康状態の確認、訪問時の検温・訓練開始前終了時の手指のアルコール消毒・訓練士、相談者のマスク着用・部屋換気のため窓の開放

#### 2) 訪問活動休止期間中の業務

コロナウイルスの感染拡大の以前から行っていたオンラインでのパソコン訓練を実施していた方を中心に希望をとり、訓練を実施した。また、視覚障害者向け機器展示室ルミエールサロンの棚卸業務などを行なった。

#### 3) ルミエールサロンの見学の中止

ルミエールサロンの設置場所である高知県立盲学校の休校措置期間(4月13日～5月24日)、学校再開後の外部からの来校制限と同等の措置を行なった。盲学校と協議を行ない、2020年8月より感染予防措置を行ないながら段階的に見学を再開したが、専門学校など集団での見学については、2020年度は実施しないこととしている。集団での見学希望の際は、出張機器展示やオンラインでの実施を検討している。

#### 4) ルミエールサロンの見学時の感染予防措置

見学予約の徹底・来場前の健康チェック（検温）・ルミエールサロン来室前後の手指のアルコール消毒（サロンに設置）・来室者全員のマスク着用（マスクは見学者が準備）・来場人数制限・部屋換気のため窓の解放・（出張機器展示や巡回相談などのイベントの中止（年度内継続））

**3.1.2.3. 課題と今後の対応策：**感染予防措置を実施しながらの業務の継続は、コロナウイルス以外のインフルエンザなどの季節性の風邪にも効果があり今後も継続して行なっていきたい。緊急事態宣言のような外出制限が今後また

起きないとは限らないため、新しい視覚リハの形として今回行なったオンラインでの相談や訓練の環境を整えていくことが重要であると考え。しかし、経済的にも、地域的にもインターネット環境のない方々への通信格差が広がっていることも忘れてはならない。さらに視覚障害者にとって触覚からの情報取得は、とても重要なことであり、接触や接近による感染の可能性が高いと言わざるを得ない。

今後の視覚リハサービスは、感染対策を実施したうえでの対面対応とオンライン対応の両輪で実施していくことが重要である。

**3.1.3. コロナ禍におけるロービジョン外来でのリモート相談対応（庄司健・原克典）**

**3.1.3.1. ロービジョン外来について：**島根大学医学部附属病院眼科ロービジョン外来（以下「ロービジョン外来」）は、2017年3月に開設された。島根県初、現状では県内唯一のロービジョン外来である。現在週1回、1日2枠・1枠2時間で開設されている。開設当初よりライトハウスライブラリーの視覚リハビリテーション担当が定期的に外来に入り、専門的な相談対応に当たっている。当初2か月に1度でスタートしたが、2020年4月より月1度へ変更となった。尚、現在では、視覚障害当事者、盲学校教員、県外の公認心理師も、定期的に相談対応に当たっている。こうして様々な分野が関わることにより、患者の多様な状況と問題点に合わせ、より専門的な対応が可能となり、結果としてロービジョン外来で対応できる幅を広げている。

**3.1.3.2. コロナ禍のロービジョン外来：**島根県では2020年4月9日に感染者が初確認された。ロービジョン外来での患者対応は続けられたが、これにより外部の相談員が来院しての対応を行なうことが出来なくなった。

この状況を受けて、庄司・原で検討を行い、来院による対応ではなく、リモートによる相談対応を試行することとした。

リモートにはWebexまたはZoomを用いた。通常のロービジョン外来時と同じように、医師・ORTが患者に対応する場に、患者にも見える形で、リモート接続したノートパソコンが置かれた。これにより、ライトハウスライブラリー側

からは、それぞれの表情も含め、対応の様子がわかる状況であった。

**3.1.3.3. 結果：**ライトハウスイブラリーの相談対応は、5月から7月の間で3日間、合計6回行なった。当初、患者の抵抗感を心配していたが、否定的な反応は見られず、逆に「ものめずらしさ」から興味を示す患者もいた。

相談対応自体は、物理的に出向いての対応に比べても大きく質を落とすことなく、また大きな問題もなく進めることができた。

#### 3.1.3.4. 実現の背景

##### 1) コミュニケーションが確立していた

前述のように、以前より定期的にロービジョン外来に出向いていたため、特に中心的な役割を担う視能訓練士とは全員と面識があった。これにより、リモート越しであっても、リモート側からお願いしたいこと（例：〇〇を試してほしい、等）を遠慮なく伝える、また受けることができる下地があった。

##### 2) 外来にある物品を把握していた

これまでのロービジョン外来訪問により、ロービジョン外来にどのような物品やリソースがあるかは把握していたため、手に取らなければ分からないものであっても、大きな問題なく紹介できた。

##### 3) リモートならではのメリット

ロービジョン外来を訪問する際には、外来にない用具等を持参しているが、その量には限界がある。リモートでの対応の場合、実際に触れてはいただけないが、ライトハウスイブラリー内にある物品は全てカメラ越しに紹介することが可能となった。

##### 4) 双方の熱意

非常事態とも言える状況で、外部からの相談対応を中止するという選択肢もあった中、患者へのロービジョンケアを提供し続けたい、その質を保ち続けたいという熱意と行動が、ロービジョン外来とライトハウスイブラリー双方にあったことが、何よりも大きな要因だったと考える。

**3.1.3.4. おわりに：**コロナ禍が続く中において、リモートという選択肢は決して珍しいものではなく、技術的なハードルも以前に比

べ低くなっている。感染症対策という点のみならず、距離的な問題を乗り越えるためにも、リモートという方法はとても有効であると実感している。それと同時にそのスムーズな運用・施設間の連携には、ベースとなる人間的なつながりが欠かせないと、改めて感じた。

第二波、第三波への警戒が言われる中、技術の活用と人とのつながりの力で、患者・当事者のサポートを続けていきたい。

## 3.2. アンケート結果

当日の参加者は48名で、アンケートの有効回答数は18票（回答率37.6%）であった。

アンケートの回答者の所属分野は、福祉が56%で最も多かった。以下教育22%、医療11%、その他(当事者など)11%であった。また、年代別では30代から50代が8割を占めており、地域別では関東甲信越が44%で最も多かった。

イベントのテーマについてはよかったと回答した方が83%であった(図1)。

特に興味を持ったテーマでは、ロービジョン外来におけるオンライン相談の試みについての報告であった(図2)。

オンラインイベントの開催希望時間について(複数回答)では、平日夜間(17時以降)が83.3%で最も多かった。

今回の実施時間(100分)に対しては、長かった、短かったと回答した方はいなかった(図4)。今後のオンラインセミナーに対して、「毎回参加したい」が56%、「内容によって参加したい」が44%で、全員が同様の企画への参加希望を持っていた。

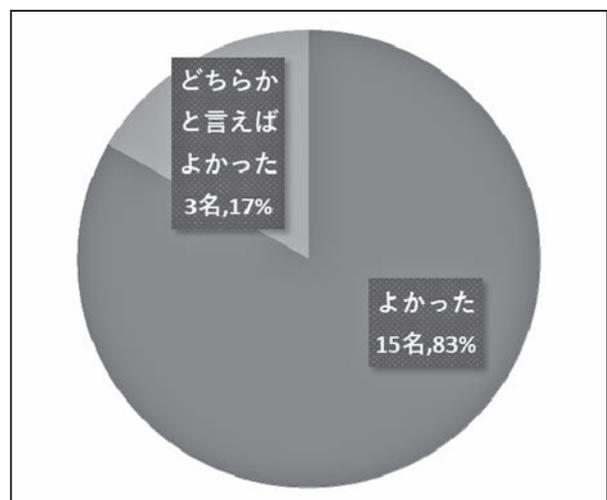


図1 テーマへの満足度

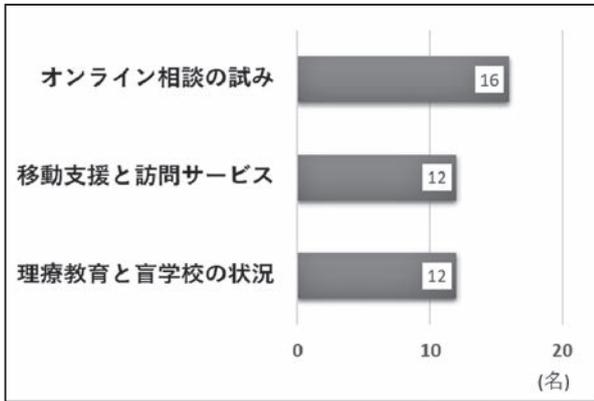


図2 特に興味を持ったテーマ

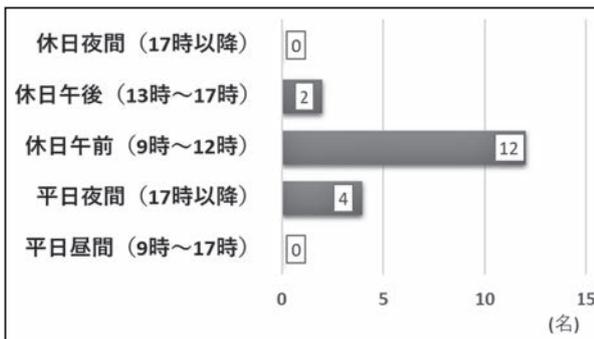


図3 オンラインイベントの開催希望時間帯

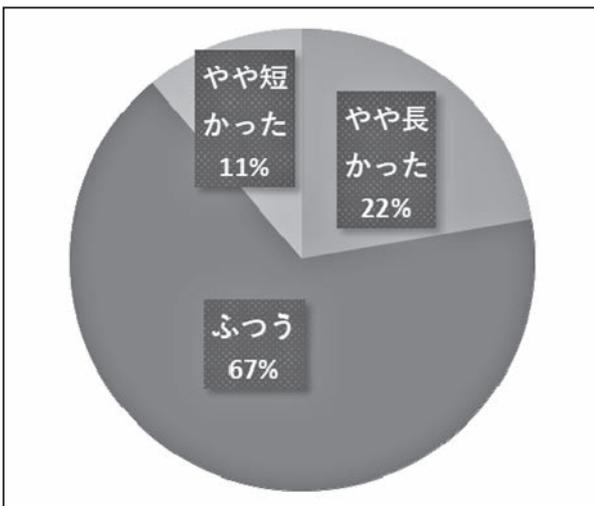


図4 実施時間の長さに対する意見

## 4. 考察

アンケート結果は概ね好評であった。また、自由回答の中には、「Zoomの導入説明やルール設定が丁寧で進行もスムーズであった」、「現在の問題に直結したテーマでとても面白く、勉強になった」、など好意的な意見が多く寄せられており、テーマ、企画内容、開催時間いずれも概ね参加者の満足度は高かった。

一方、課題としては、アンケートの回答率が低かった。これは、実施日から1週間ほど経ってから回答依頼をしたためと思われる。また、自由回答の中にあつた「質疑の時間を長めにしてほしい」、「資料が事前にあるとメモがとりやすい」などの意見は次回以降の改善事項である。「久しぶりに他の地域の方の話が聞けてよかった」「最後に交流できる時間帯があるとよかった」という意見も複数出ており、オンラインセミナーは、様々な地域の貴重な交流の機会として、継続的な開催を求められていることがわかった。